

【泉大津市長賞】

福引き

野崎眞弓・泉大津市

すっかり薄れていた記憶が、思い浮かんできたのは、広報いづみおおつ令和二年九月号の表紙で紹介された「台風二十一号による泉穴師神社の御神木の倒木から二年、新たな命の芽吹き」の写真を目にした時でした。

週末の恒例の主人との週一のウォーキングの時に、「今日は穴師神社に行きたい」と珍しく私から希望を言つて久々に神社に足を向けました。そこで、平成三十年の九月に襲来した台風二十一号の影響で、樹齢六百年のクスノキの御神木が倒れてしまい、そのままの状態で自然災害遺産として後世に残すことになった、ということを知りました。

もうかれこれ五十数年も前のことになります。私はまだ小学生でした。松の内も過ぎて寒さも本格的になってきた頃の一月十日の夕方、仕事終わりの両親に連れられ泉穴師神社に十日戎の福籠を買いに行きました。神社の境内の真ん中では、古いお札やお守りを焼いてくれる『どんど焼き』をしていてお参りする人たちでごった返していました。火の粉が舞つて横を火傷しないかとビクビクしながら通り抜け、地元のおじさんたちが売っている福籠売り場に行きます。家が染色系の商売をしていたということもあり、毎年商売繁盛を願い家族でお参りをし福籠を買っていました。

ある年、福籠を買った時にもらえる福引き券を両親は私に渡し、ガラガラ抽選を回させてくれました。すると、なんと、生まれて初めて福引きが当たつたのです。その時の景品は地元泉大津産の毛布でした。いまでは何等の景品だったのかも覚えていませんが、両親が大変喜んでくれたのは覚えています。その年の冬からは、その当たつた毛布に私は包まれ暖かく眠れました。兄や姉はとてもうらやましそうにしていました。

次の年も両親は同じように私を連れて十日戎に行き福籠を買い私に福引きをさせてくれましたが、あの時の福引きは、私にとつて生涯たつた一度きりの大当たりとなつてしまつたようです。三人兄弟の末っ子の私は、両親から大切に育ててもらいました。一度、福引きを当てたことで、毎年、期待され、「この子は強運の持ち主」と言わんばかりに福引き券を託されました。当たれ、当たれと心の中で念じガラガラを回しましたが、欲が出るとダメですね。その後は、一度たりとも兄姉の期待にも添えませんでした。

真面目で曲がったことが大嫌いで、一代で商売を大きくし、生涯仕事一筋の人生だった父。その父をしつかり者の母が寄り添い支えていました。商売が上手くいかなくなつた時期も多々あつたと聞きました。真面目だけで不器用な父は、得意先相手の接待などは苦手な人で、ただ頂いた仕事をコツコツと丁寧にすることで、誠意を示していたように思いま

す。納品の期限がせまつた時には、夜遅くまで残業することは当たり前でした。私達子どもは、両親の帰りを首を長くして待つていたものでした。

苦勞の甲斐もあり、少しずつ商売も軌道に乗り、子ども三人にしっかりと教育も付けてくれました。常に家族のことを第一に考え、子や孫たちの幸せを願つてくれていました。今となつては、あの暖かい毛布には、大切に育てくれた両親の愛情が詰まつていたように思います。

その後、結婚してからの私は、主人が勤め人だったこともあり十日戎の福笹を買うことはなくなりました。両親も他界しましたが、いまでも十日戎の福引きで当たつた毛布のことは忘れられません。福引きは当たらなくとも優しい主人や子や孫たちに恵まれ幸せに過ごしています。今の私達のこの幸せは、両親のおかげと感謝しています。私も両親が私達にしてくれたように、家族を大切に子や孫たちの幸せを願い、これからも主人と二人で仲良く過ごして行きたいと思います。

残念ながら五十数年前の福引きの毛布は、今は手元にはありませんが、生前、母が大事にしまつて置いてくれていたのは覚えていました。母にとつても思い出深い毛布となつていてのでしよう。決して順風満帆とはいかなかつた商売でしたが、父と二人して一步一歩乗り越えて歩んで行つた人生。そんな中、福引きで当たりが出るということに一筋の光を見た思いがしたのではなかつたかと思います。

今度は、涼しい時期になつたら孫を連れて御神木にお参りに行こうと主人と話しています。